

保護者の被援助志向性の特徴と 変化プロセスに関する質的検討

永井知子*

A Qualitative Examination of the Characteristics and Change Processes of Help-Seeking Preferences of Mothers.

The present study investigated the characteristics and change process of help-seeking preferences of mothers (solution of self, tendency for dependence, ambivalent). Narrative data was collected and analyzed through Steps for Coding and Theorization (SCAT) and Trajectory Equifinality Model (TEM) qualitative methods. The findings suggest that there were three features. (1) Support Resources are different by characteristics of help-seeking preferences and may not necessarily be a family. (2) The expansion of the network is related to the reliability to a partner, a change of the consciousness from the delivery (obedience and adaptability), and personality, and it is necessary to examine the timing and method of the support depending on type. (3) All mothers demand informational support in particular about the trouble of the child. In addition, For mothers who are difficult to self-disclose, it is important to expand the support network by establishing a relationship of trust through sharing of children's episodes and communicating information on anxiety caused by age of development and solutions.

I. 問題と目的

2015年4月より施行された子ども・子育て支援新制度では、すべての子育て家庭を対象に、地域のニーズに応じた様々な子育て支援の充実が掲げられている。家族をとりまく環境の変化に伴い、現代の複雑かつ多様な保護者への対応と子育て支援の必要性は今後ますます高まるといえる。しかし、支援が必要であると考えられる保護者ほど支援の場には参加していない状況（大阪総合保育大学総合保育研究所子育て支援プロジェクト、2015）や、保護者が支援に抵抗感をもっている場合は支援につながらない（笠原、2000）といった状況があることも事実である。必要に応じて他者に援助を求める行動は、援助要請行動といわれ、子育て支援領域においても少しずつ研究が蓄積されている（永井、2017a）。なかでも、「援助を求

めるかどうかについての認知的枠組み（水野・石隈、1999、pp531）」である被援助志向性は援助要請行動に影響を与えるとされており、永井(2017b)は被援助志向性の2つの下位概念（「援助に対する抵抗感」と「被援助欲求」）に注目し、支援に抵抗感をもつ保護者が子育てで悩んだ際に助けを求めない場合、育児不安が高まり、子育て状況が悪循環に陥る可能性を示している。また、被援助志向性の下位概念の得点をもとに分類した3つの群（「自力解決」、「他者信頼」、「アンビバレント」）について、自由記述の分析により、身近な他者と保育者に対する援助を求めにくい理由が異なることを示している（永井、2018）。このような援助を求めにくい理由の分析により、将来的に援助に至らない可能性のある保護者を早期に把握することが可能となり、子どもの健全な成長発達を支えるための予防的支援のあり方を検討することができるといえる。ただし、質問紙調査では、ある一時点に焦点をあてているに過ぎず、それぞ

* 四国大学短期大学部

れの群の母親がどのような時期にサポートを必要とし、対処してきたかまでは明らかにできていない。各群の母親にとって適切なタイミングと支援方法を検討する上では、ライフイベントを通じて得た経験の蓄積を加味することが必要になると考えられる。これまで、加藤（2005、2007）が結婚時から第一子就学までの母親に対してインタビュー調査を行い、ライフイベントと被援助志向性の変化のパターンや、サポート源との関係性について検討している。ただし、母親のもつ援助に対する抵抗感や欲求の高低については検討されていないことから、本研究では、被援助志向性の各群の特徴をより深く掘り下げる質的な分析によって、ライフイベントを把握した上で、被援助志向性の変化プロセスを検討することを目的とする。

II. 方法

1. 研究協力者とインタビュー方法

安田・サトウ（2012）によれば、話を聴く際の対象人数について、1名を対象にする利点として、個人の経験の深みをさぐることができるとしている。そのため、被援助志向性の特徴と被援助志向性が変化するプロセスを明らかにしようとする本研究においては、被援助志向性の3群各1名を対象に、2018年1月～2月にインタビューを実施した（インタビュー研究への協力可否については質問紙調査の際に確認し、承諾を得た）。なお、被援助志向性の群分けについては、永井（2018）が、被援助志向性尺度の下位尺度（「援助に対する抵

抗感」、「被援助欲求」）の得点をもとに分類したものであり、インタビュー協力者はその群分けをもとに選出した。インタビューのテーマは「困ったことがあったときの援助要請行動」とし、ライフイベントを意識しながらこれまでの援助要請行動について、半構造化インタビューを行った。協力者の概要については表1の通りである。インタビュー内容は協力者の同意を得たうえでICレコーダーに記録し、データを逐語記録としたものを分析対象とした。

2. 分析方法

本研究では、語りから概念名を抽出する際にSCAT（Steps for Coding and Theorization：以下、SCAT（大谷、2008、2011））を用い、その概念名をもとにTEM（Trajectory Equifinality Model：複線径路・等至性モデル：以下、TEM（サトウ・安田・木戸・高田・ヴァルシナー、2006））を用いて分析を行った。SCATは、4つのステップに基づいてコーディングを行い、構成概念、ストーリーラインを記述し、そこから理論化を行う分析手法である。この手法は小さな質的データの分析にも有効であることや分析手続きが明晰であり、比較的スムーズに理論化を導くことができることとされ、分析の恣意性を極力排除することが可能になるとされることから、コーディングの際には本手法を用いた。また、TEMとは、人間の成長について、その時間的変化を文化との関係で展望する新しい試みを目指したもので（サト

表1 インタビュー協力者の概要

被援助志向性 群分け	名前	年齢	就労状況	子ども	家族形態	インタビュー 時間
自力解決	A	34歳	有職(フルタイム)→(3歳～)パートタイム	5歳(女)	核家族*1	約60分
他者信頼	B	39歳	育休中(フルタイム)	2歳(男)・0歳(男)	核家族*2	約60分
アンビバレント	C	35歳	有職(フルタイム)	2歳(女)	核家族*3	約80分

*1 母方両親が同町内居住。父方両親が車で約30分程度のところに居住。

*2 母方両親が車で約40分程度のところに居住。父方両親が同町内居住。

*3 母方両親が車で約30分程度のところに居住。

うら、2006)、人間の発達や人生径路の多様性・複線性の時間的変容を捉える分析・思考の枠組みモデルとされる。

本研究では、被援助志向性の変化を時系列的な視点から明らかにすることを目的としていることから、時間的プロセスを捨象しないこの手法が合致していると考えた。分析の手順として、まずインタビューデータの逐語録を作成後、心理学を専門とする研究者2名でSCATの手順に沿って抽出された構成概念をもとにストーリーラインを作成した。次に、構成概念について時系列を意識して内容の関係をネットワーク化した。その際、「保護者の被援助志向性が変化する」をTEMの概念である等至点 (Equifinality Point: EFP) として設定し、「径路」「分岐点」「社会的方向付け (Social Direction: SD)」「社会的ガイド (Social Guidance: SG)」を考慮して検討を行った。

3. 倫理的配慮

本研究の実施にあたり、所属大学内の倫理審査委員会の承認を得た。インタビュー調査については、研究説明書を用いて口頭で説明を行うとともに、書面により同意を得た。

Ⅲ. 結果

被援助志向性の群ごとに、インタビューデータを分析した結果、それぞれTEM図(図1~3)のように3つの期に分けられた。以下、悩みが発生したという状況を必須通過点 (OPP) とし、群ごとにそれぞれの期でどのような経験をして被援助志向性が変化しているのか見ていくこととする。なお、TEM図については、左から右へ流れる非可逆的時間という時間軸を基に、発話データから得られた径路を実線で記入しており、〈 〉内には構成概念を配置している。また、「 」は語りから引用したものであるが、方言などの文章表現は意味が変わらない程度で変更を加えている。「 」内の () は文章を分かりやすくするため、著者が加筆しており、以下、文中においても同様の

記載とする。

(1) 自力解決 (Aさん) について

1) 第Ⅰ期：特定の相手への相談

独身時代から出産直後までの時期について、援助要請するかどうかの意思決定には、相談相手が〈真剣な聴き手; SG1〉かどうかの影響しており、信頼できる〈特定の相手〉にのみ相談していた。相談しない理由には、〈口の軽い人に対する不信任感; SD1〉を挙げていた(事例1)。また、〈結婚を機に相談相手の一員となる夫〉というように、結婚という大きなライフイベントによって、相談できる相手が増加していた。

事例1：Aさんの語り

「誰にでも言うっていうか。あの子、こんなんで悩んでるよみたいな。信用ならん。他の人に言ってほしくないのに」

2) 第Ⅱ期：育児と仕事の両立に模索する日々

「出産して3か月後から(保育所に)入れたんですよ。だから仕事に復帰した」というように、〈育児と仕事の両立〉は急に始まったとのことである。〈初めての子育てに関する不安や焦り; SG2〉もあったことから、子どもの年齢があがるとともに仕事関係の人が援助要請の相手に加わっていた。ただし、〈相談するかどうかは信頼の有無; SD2〉であり、不信感があると相談相手として認識しないとといった気持ちは、独身時代から変化していなかった。

3) 第Ⅲ期：新しいライフスタイルによる変化

「(仕事を) ちゃんとしたいのに、子どももママ、ママ… (中略) せないかんことがいっぱいある」という〈ライフワークバランスの困難さ〉に加え、保育所の送迎など、物理的に協力してくれていた夫が〈体調不良により協力不可能になる〉ことで育児と仕事の両立の限界を感じたAさんは、就業形態をフルタイムからパートタイムに変更した。その結果、保育所の役員会やSNSつながりなど〈ネットワークの広がり; SG3〉ができ、援助を

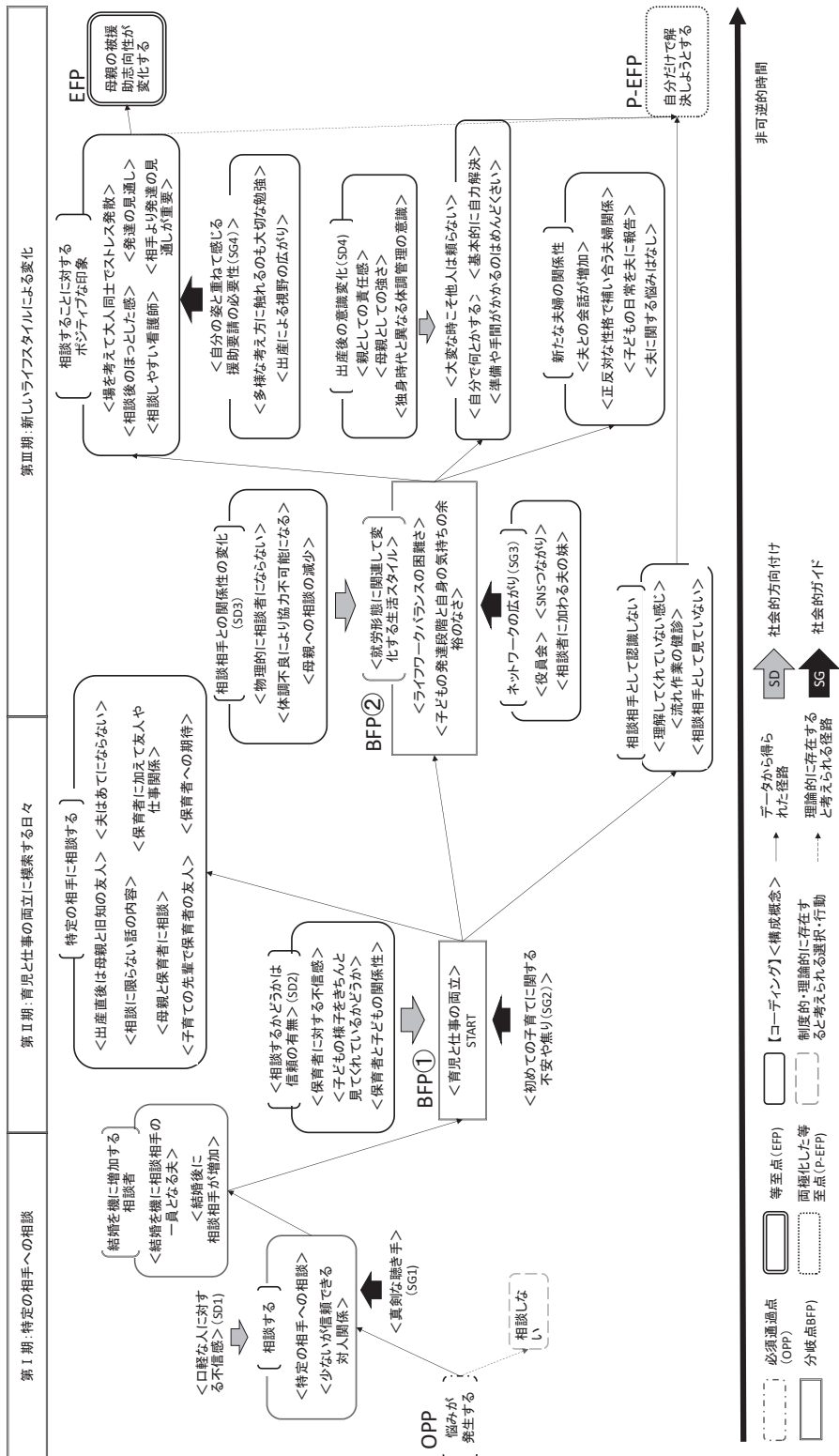


図1 Aさん(自力解決)の被援助志向性が変化するプロセス

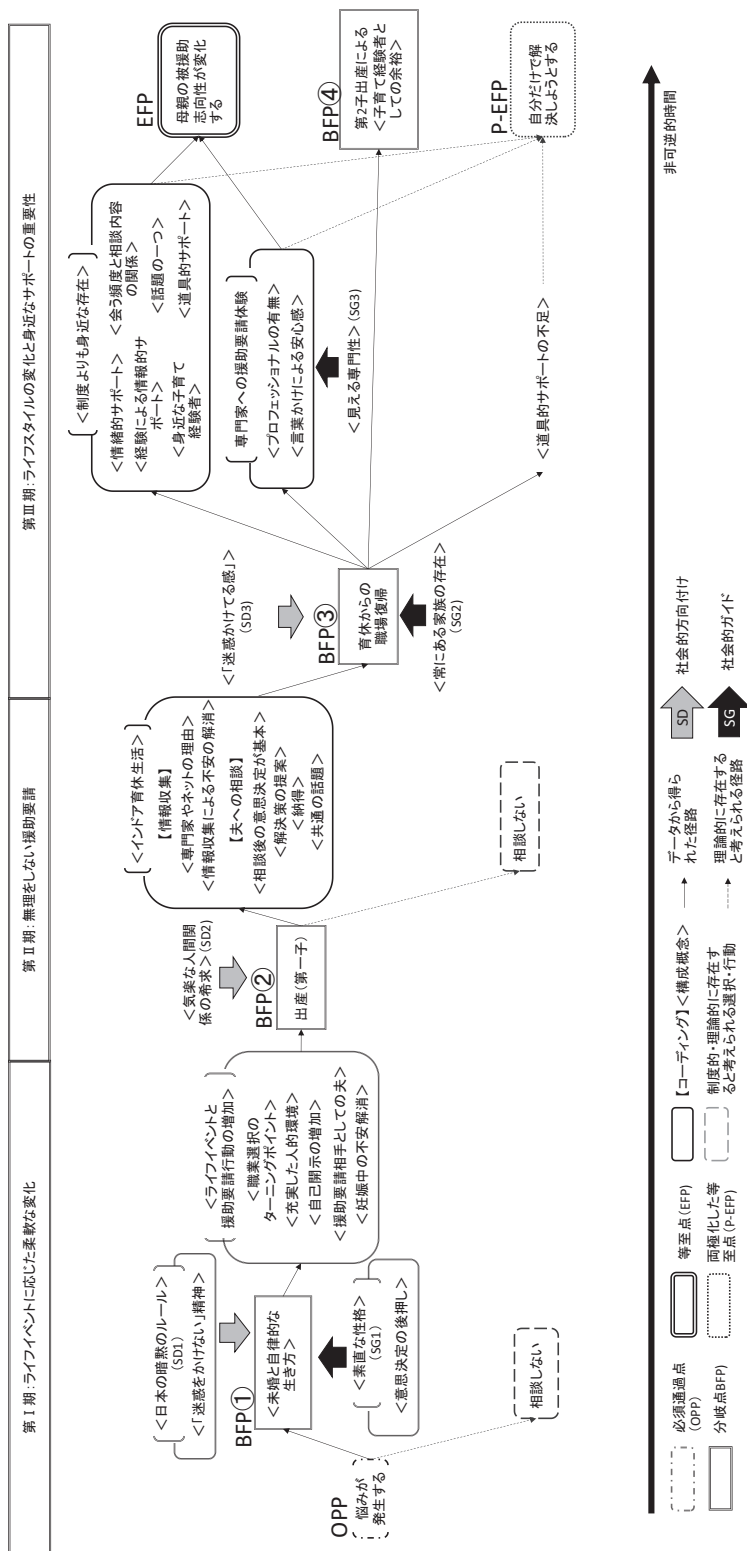


図2 Bさん (他者信頼) の被援助志向性が変化するプロセス

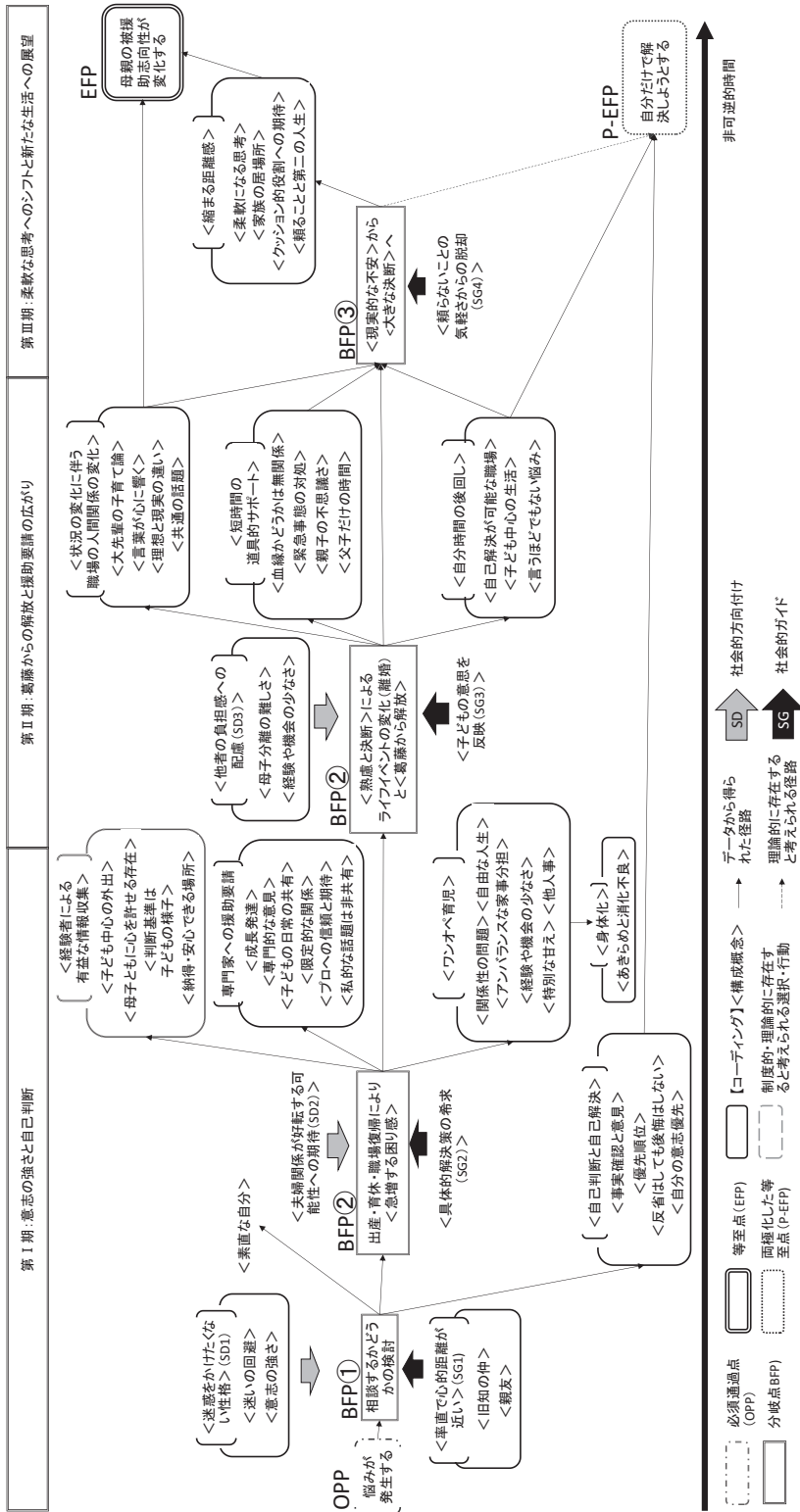


図3 Cさん(アンビバレント)の被援助志向性が変化するプロセス

求めることに対するポジティブな印象を得るようになってきている。さらに、虐待などのニュースを見て〈多様な考え方に触れるのも大切な勉強である〉と思い、〈自分の姿と重ねて感じる援助要請の必要性；SG4〉を意識すると、被援助志向性が高まっていることがうかがえる。一方で、母親としての強さや責任感といった出産後の意識変化（SD4）により、子どもの調子が悪い時など、援助を求めても良いと思われる状況において、〈自分で何とかする〉といった強い信念がうかがえる（事例2）。

事例2：Aさんの語り

「調子悪いときこそ親が見てあげないとみたくない、そういう気持ちがあるから、ましてや、他人に預けようとは思わない。調子悪いときこそ子どもって、母が必要だったり父が必要だったりするじゃないですか。」

(2) 「他者信頼（Bさん）」について

1) 第Ⅰ期：ライフイベントに応じた柔軟な変化

独身時代から出産直後までの時期、元来〈素直な性格；SG1〉であるBさんは、何か困ったことがあった際、〈意思決定の後押し〉として他者を求めていた。独身のときには自分だけで解決することも多かったが、就職や結婚といったライフイベントのたびに、自分が柔軟に環境に適応することで、援助要請をする相手が増加し、不安等を解消していたことがうかがえる。一方で、〈「迷惑をかけない」精神；SD1〉は、援助要請行動を抑制する要因になっていたようである（事例3）。

事例3：Bさんの語り

「妊娠してるからってやっぱり甘えられないしっていうのは、すごく思っていました。妊娠・出産・育休って人が重なると、人数が少なくなると会社に迷惑を掛けるっていうことはあるので、それは常に意識するというか、気にしていました。」

2) 第Ⅱ期：無理をしない援助要請

第一子出産後、Bさんの援助要請行動は〈気楽な人間関係の希求；SD2〉から限定的なものとなり、〈インドア育休生活〉となっていた（事例4）が、気になることがあると専門家やネット、夫といった限定された対象に援助を求めていたようである。そのため、「特にそんなに大変だったっていうことは（なかった）」と回想するように、大きな不安を抱くことなくBさんなりに居心地の良い時間を過ごしていたことがうかがえる。

事例4：Bさんの語り

「ママ友とかそういうのが面倒くさいって思うタイプで、私、受け入れるんですけど、気を遣ったりとか面倒くさいなっていうのがあったので、あまりそういう場には行ったことがなく。」

3) 第Ⅲ期：ライフスタイルの変化と身近なサポートの重要性

育休からの職場復帰に伴い、〈制度よりも身近な存在〉によって、道具的・情動的・情緒的なサポートを受けており、Bさんにとって、〈常にある家族の存在；SG2〉は、困った時の支えとして機能しているようである。また、保健師や保育士などの専門家に対しては、何の専門職かが分かることが大事であり、不明瞭な場合には、援助を求めないということであった。一方で、現在は第二子出産後の育休中で余裕はあるものの、〈「迷惑かけてる感」；SD3〉は独身時代から一貫してBさんの援助に対する抵抗感を高める要因となっているようである（事例5）。

事例5：Bさんの語り

「迷惑を掛けてるなって思いつつ、しょうがないので（子どもを）預ける」

(3) 「アンビバレント（Cさん）」について

1) 第Ⅰ期：意志の強さと自己判断

Cさんは、独身時代から悩み発生状況において、援助要請行動自体が少なく、心的距離が近い〈親

友)には〈素直な自分〉でいられるものの、〈自己判断と自己解決〉が基本的な問題解決手段だったようである。それには、〈迷惑をかけたくない性格；SD1〉や〈意志の強さ〉が影響しており、自分の出した結論については後悔しないということであった(事例6)。

事例6：Cさんの語り

「昔から頼るのは得意ではない。あんまり迷惑を周りにかけないようにしようとするし、もともと性格があるのかな。」
 「今思えば、聞いとけば良かったなと思うことはあるけど、自分で決めたことであれば後悔しないけど、流されてやめとこうみたいなのって、やっぱりあのときこうしとけば良かったとか思ったりもするから、私は後悔はしてはなくて。」

出産・育休・職場復帰といったライフイベントにより、「悩むことだらけになった」Cさんは、子どものことについては経験者や専門家から情報的サポートを得ていた。「他の人に頼れない分」夫に対して〈特別な甘え〉をもっていたCさんだが、〈ワンオペ育児〉状態になるなど、夫との関係に〈あきらめと消化不良〉を感じていたようである。しかし、夫婦関係が好転することを期待していたことから、他者には援助を求めず、不眠や食欲の減退など〈身体化〉するまで一人で悩み抱えていたとのことである(事例7)。

事例7：Cさんの語り

「(関係が) 何とかなるかなと思っているときは誰にも言わないでおこうと思ったんですよ。何とかなったときに、それ(状況)を知ってる人がおらん方がいいと思ったから」

2) 第Ⅱ期：葛藤からの解放と援助要請の広が

離婚というライフイベントを経験した後、図らずとも周囲との関係性に変化が見られ始め、職場の上司に対して子育てについて相談する機会が増えたとのことである。また、道具的サポートにつ

いては、人見知りの激しい〈子どもの意思を反映；SG3〉しつつ、親戚や元夫に求めていたとのことである。一方で、緊急事態以外のことについては、〈他者の負担感への配慮；SD3〉から、自分の時間を割いてでもなんとか解決していたため、〈子ども中心の生活〉を続けていた(事例8)。

事例8：Cさんの語り

「(頼ろうとしても) 子どもが泣くと、迷惑度が違うでしょう。預ける人への負担というか。(中略) そこまでしてって感じかな。緊急事態以外は、あんまり頼らんかな。(中略) 子どもにとっての負担が大きいから。」

3) 第Ⅲ期：柔軟な思考へのシフトと新たな生活への展望

環境の変化に伴う〈現実的な不安〉から、Cさんは実家を頼るといった〈大きな決断〉をした。実家との〈縮まる距離感〉に緊張感はあるものの、クッション的役割をもつ子どもの存在にも助けられ、〈柔軟になる思考〉が芽生えたようである。また、これまで「(何事も) 自分でしたほうが楽って思ってた」Cさんだが、〈頼らないことの気軽さからの脱却；SG4〉により、実家を〈頼ることと第二の人生〉に新たな期待を見出しており、被援助欲求が高まっていることがうかがえる(事例9)。

事例9：Cさんの語り

「親に見てもらって、私の時間できるじゃないですか、ちょっとね。私だって、第二の再婚もあるかもしれないし。」

Ⅳ. 考察

本研究では、ライフイベントによって被援助志向性がどのように変化するか群ごとにそのプロセスを明らかにしようとした。本研究により得られた知見は以下の通りである。

(1) 被援助志向性の3群にみる被援助志向性の特徴と変化

1) 自力解決群 (Aさん)

自力解決群のAさんにとって、相手への信頼感や、ストレス発散ができていくという状況、発達の見通しをもつことで安心感を得た経験が、被援助志向性の変化に影響を与えていた。このことは、過去に相談経験がある母親の方が援助要請行動につながりやすく、相談時の満足度が高い場合は、次に相談しようと思う意識を高める（佐藤・中村、2012、笠原、2006）という先行研究と同様、相談経験に対するポジティブな印象が被援助志向性の変化を促していると考えられる。また、結果より、親になることで芽生えた責任感や強さは、大事なことは相談しないという信念をもたらしていることが確認された。親としての責任感や強さについては、柏木・若松（1994）が明らかにした「親性の発達」のうち、ポジティブな側面の「生き甲斐・存在感」「自己の強さ」にあたるといえる。しかし、諸井（2012）が自力による解決志向が強くなると援助要請が抑制される可能性があるとししているように、親になることは人格的な成長をもたらす一方で、援助に対する抵抗感を高め、ともすれば育児不安や子どもへの不適切な関わりを増大させる危険性もあるといえる。

2) 他者信頼群 (Bさん)

他者信頼群のBさんは、置かれている状況に合わせて柔軟に自身の考えを変えており、対人関係においてよりオープンな姿勢を持っていることがうかがえる。また、自分に必要なタイミングで特に身近な人から情緒的・情動的・道具的サポートを得ることにより、不安の解消や、意思決定の後押しをしてもらっていた。意思決定の後押しについては、諸井（2012）のいう「親としての自信のなさから問題解決の結果としての答えを委ねる」依存的援助要請の特徴とも重なるが、Bさんの場合、素直なパーソナリティが関連し、さらに援助の必要性についても吟味していることから、受動的な意味合いは少ないと考えられる。一方で、他

者信頼のBさんにとっては、他者に迷惑をかけているかどうか、援助に対する抵抗感を高める可能性があること示唆された。他者信頼群は、周囲の人とうまくやっていきたいといった被援助欲求が高いことが示唆されており（永井、2018）、さらに、他の群に比べて育児不安が低いと示されている（永井、2017b）。石・桂田（2010）は、育児期の母親を対象にして文化的自己観（文化において歴史的に共有されている自己についての前提）とディストレスとの関連を検討し、他者との協調的関係を重視する母親の育児不安が高いことを示しており、一見、矛盾した結果のように思えるが、現在Bさんは他者に迷惑をかけている感覚により道具的サポートの不足に困りつつあり、状況が改善されないならば今後育児不安や育児ストレスが高まるといった精神的健康への負の影響が出る可能性も考えられる。

3) アンビバレント群 (Cさん)

ソーシャル・サポート・ネットワークが小さく、援助要請をすること自体が少なかったアンビバレント群のCさんにとっては、結婚相手である夫は特別な援助要請相手となっていた。しかし、夫婦関係がうまくいかず離婚したことにより、現実的な不安が増大し、職場の先輩を援助要請の対象として認識するようになっていた。さらに「親性の発達」のネガティブな側面である「自由の喪失」（森下、2006、高橋・高橋、2009）をより意識するようになったことで、頼ることの必要性を感じ、被援助志向性が高まっていったと推測される。一方で、Cさんは、自身の問題については親友にも事後報告で済ませる等、1人での問題解決を試みていた。吉永（2007）は、育児中の母親は、道具的・情緒的サポート源として、甘えが許される自分の親や配偶者、きょうだいといった身近な存在を選ぶとしている。しかし、意志が強く、他者に頼りたくても頼れない対人関係スタイルをもつCさんのような母親は、「他の人に頼れない分」特定の人に対してのみ甘えを表出する可能性がある。さらに、相馬・山内・浦（2003）は、サポート・

ネットワーク内の親密なサポート源との間で葛藤が生じた場合、それ以外のサポート源を確保していなければ、交際期間に応じた適応的な対処行動が抑制される可能性があること示唆している。実際、サポート・ネットワークが小さいCさんの場合、甘えを表出していた夫との関係がうまくいかなかったときに他に頼れる人がおらず、非常に大きな心理的負荷を抱え、不眠や食欲の減退など身体化するまでに至っていた。

(2) 総合的考察

母親の被援助志向性の変化を概観してみると、結婚が、状況の変化に柔軟な他者信頼群だけでなく、独身時代に他者への援助に対して積極的でなかった自力解決群、アンビバレント群においても、被援助志向性が高くなるきっかけとなっていた。コミュニケーション態度について夫婦間の比較を行った粕井(2014)によると、結婚年数14年未満の夫婦関係において、妻は夫に対して「真っ先に相手に報告する」や「自身の悩み・迷いごとを相手に相談する」といった共感・接近的なコミュニケーション態度をとっていることが示されており、夫に対する援助要請意識の強さがうかがえる。また、出産後については、物理的・精神的に援助を必要とすることが多く、さらに、いずれの群の母親も有職者であることから、仕事と育児の両立においてストレスフルな状況に置かれたことが、被援助志向性を高めるきっかけとなっていた。加藤(2005)は、有職者において出産後に被援助性が高まること、出産から子育て期間に母親が他者との間に関係性を再構築しようとするとしており、森永・山内(2003)も、出産後の経過に伴い、効果を持つサポート・ネットワークは変容、拡大し、サポート源一人当たりのサポート量を減少させるだろうと示している。本研究においても同様に、ライフイベントを機にサポート・ネットワークが少しずつ変化・拡大していることが示唆された。さらに森永・山内(2003)は、出産直後の非常にストレスの高い状態については、配偶者のような

狭いサポート・ネットワークのサポート源により多量のサポートを入手することでストレスの影響を緩和しようとする示唆しているが、本研究からは、サポート源は人によって異なり、必ずしも家族とは限らないこと、ネットワークの拡大には、相手への信頼度、出産による意識の変化、パーソナリティ(素直さや柔軟さ)が関連しており、その群に応じた支援のタイミングと方法を検討する必要性が示唆された(表2)。自力解決群の場合は、出産後の意識変化(親としての責任感などの信念)が援助要請行動を抑制する可能性があるということ視野に入れる必要があるため、「親がせねばならないといった信念」を緩めるような心理教育(たとえば“Nobody’s Perfect”のような子育て中の親支援プログラム)や、問題状況を客観的に評価できるような指標の提示などが重要になるだろう。他者信頼群の母親については、他者への配慮や遠慮が援助要請行動を抑制する可能性が考えられる。柏木(2017)が、働く母という複数の役割を担うことが精神的健康や幸福感を高めるが、そのためにはライフワークバランスの重要であると述べるように、他者に遠慮することなく援助を求められるような環境の整備や社会保障制度の充実が必要になるといえる(内閣府、2008)。アンビバレント群の母親については、サポート・ネットワークをいかに増やすかが重要になるといえる。いずれの母親についても、子どもに関する悩みについては、特に情動的サポートを積極的に求めており、出産後の早いタイミングで子どもの発育や発達状況に焦点をあてた関わりについては受け入れやすいことが示唆される。また、自己開示しにくい母親については、子どもの存在を媒介とすることで、被援助志向性の変化を促すことが示唆される。そこで、子どものエピソードを共有したり、子どもの発達年齢に応じて生じうる不安要素(たとえば離乳食のことや人見知りなど)に関する情報や対応策を伝えたりするといった関わりにより、信頼関係を築くことで、援助要請できる相手や居場所を拡大していくことが大切である

表2 被援助志向性の群別の特徴と支援のあり方

被援助志向性 群分け	特徴 (永井(2018)より一部抜粋)	本研究より得られた 被援助志向性の変化に 影響を与える要因	支援のあり方 ()内は支援のタイミング
自力解決	「援助に対する抵抗感」： 中程度 「被援助欲求」：低い →困難な状況においてどちらかという人と一緒に解決しようとするのではなく、自力でなんとかしようとする傾向	〈抵抗感を低くする要因〉 ・相談経験によるポジティブな印象（相手への信頼感・ストレス発散・発達の見通しを持つことによる安心感） 〈抵抗感を高くする要因〉 ・親としての発達（責任感・強さ）	〈妊娠中の母親教室・両親教室など〉 ・「親がせねばならないといった信念」を緩めるような心理教育（たとえば“Nobody's Perfect”、“トリプルP”のような子育て中の親支援プログラム） 〈出産後の定期的な機会（乳幼児健診など）〉 ・問題状況を客観的に評価できるような指標の開発とそれを利用した支援
他者信頼	「援助に対する抵抗感」： 最も低い 「被援助欲求」：最も高い →困難な状況においてどちらかという人と一緒に解決しようとするのではなく、自力でなんとかしようとする傾向	〈抵抗感を低くする要因〉 ・対人関係スタイル（オープン・柔軟さ） 〈抵抗感を高くする要因〉 ・他者への遠慮や迷惑をかけているのではないかといった懸念	〈妊娠中～出産後〉 ・ライフワークバランスの充実 ・他者に遠慮することなく援助を求められるような環境の整備や社会保障制度（現在の取り組みについては、内閣府(2008)参照）
アンビバレント	「援助に対する抵抗感」： 高い 「被援助欲求」：中程度 →困難な状況において自力で解決したい気持ちはあるが、どこか人と一緒にという思いを捨てきれない傾向	〈抵抗感を低くする要因〉 ・悩みの内容（子どもに関する悩み） 〈抵抗感を高くする要因〉 ・サポートネットワークの小ささ（特定の人へののみ甘えを表出）	〈妊娠中〉 ・信頼関係の構築とサポートネットワークの拡大 〈出産後できる限り早い段階〉 ・子どものエピソードの共有、子どもの発達年齢に応じて生じる不安要素（たとえば離乳食のことや人見知りなど）に関する情報や対応策を伝える

といえる。

(3) 本研究の限界と今後の課題

本研究では、ライフイベントと被援助志向性の変化プロセスを明らかにすることにより、被援助志向性の類型に応じた支援のあり方について探索的に検討した。今後は、これらの傾向をもとに支援者が保護者の特徴を捉えやすくなるようなチェックリスト等の作成により、多様化した家庭のニーズに合わせた実践への応用を検討することも必要であろう。ただし、今回、各群1名のみを対象にしていることから、一般化することは難しく、本研究の限界であるとともに、被援助志向性の特徴で群分けをすることにより、他の特徴を見

逃したり、実際にはない特徴まで包括する危険性もある。あくまで個人のニーズに合わせた支援であることは前提としたうえで、予防的観点として、これまで支援につながりにくかった保護者への家庭教育支援の糸口になる方法を見出していく必要があると考えられる。

引用文献

- 笠原正洋「保育者による育児支援：子育て家庭保護者の援助要請意識および行動から」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』第32号 2002 51-58
- 笠原正洋「園の保護者による保育者への援助要請行動：満足度および援助要請意図の関連」

- 『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』第38号 2006 19-26
- 柏木恵子・若松葉子「「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み」『発達心理学研究』第5巻(1) 1994 72-83
- 柏木恵子「おとなが育つ条件」2017 岩波新書
- 粕井みづほ「夫婦間コミュニケーションの特徴と結婚年数による違い」『日本家政学会誌』第65巻(2) 2014 50-56
- 加藤道代「子育て期の母親における「被援助性」とサポートシステムの変化(1)」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第54巻(1) 2005 353-370
- 水野治久・石隈利紀「被援助志向性、被援助行動に関する研究の動向」『教育心理学研究』第47巻(4) 1999 530-539.
- 森永今日子・山内隆久「出産後の女性におけるソーシャルサポートネットワークの変容」『心理学研究』第74巻(5) 2003 412-419
- 森下葉子「父親になることによる発達とそれに関わる要因」『発達心理学研究』第17巻(2) 2006 182-192
- 諸井泰子「乳幼児を持つ母親の子育てにおける援助要請行動：自律的援助要請・依存的援助要請を視点とした検討」『有明教育芸術短期大学紀要』第3号 2012 29-40
- 永井知子「子育て支援領域における「困り感」に関する文献検討」『四国大学紀要人文・社会科学編』第48号 2017a 83-91
- 永井知子「母親の被援助志向性と養育態度、育児不安の関連」『日本心理学会第81会大会論文集』2017b
- 永井知子「母親の被援助志向性と援助を求めにくい理由の関連—身近な人と保育者に注目して—」『兵庫教育大学教育実践学論集第19号』2018 87-96
- 内閣府男女共同参画局「地方公共団体における仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)の推進に関する事例集」2008
- 大阪総合保育大学総合保育研究所子育て支援プロジェクト「子育て支援のいまとこれから—大阪府下の保育所・幼稚園での実態調査から—」『ふくろう出版』2015
- 大谷尚「4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』第54巻(2) 2008 27-44
- 大谷尚「質的研究シリーズ SCAT: Steps for Coding and Theorization—明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法」『感性工学』第10巻(3) 2011 155-160
- 佐藤陽子・中村真理「乳幼児をもつ母親の被援助志向性に関連する要因」『東京成徳大学臨床心理学研究』第12号 2012 26-36
- サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・高田沙織・ヤーン・ヴァルシナー「複線径路・等至性モデル—人生径路の多様性を描く質的心理学の新しい方法を目指して」『質的心理学研究』第5巻(5) 2006 255-275
- 石 曉玲・桂田恵美子「保育園児を持つ母親のディストレスとソーシャル・サポートとの関係—育児不安と精神的健康度に焦点を当てて」『家族心理学研究』第27号(1) 2013 44-56
- 相馬敏彦・山内隆久・浦 光博「恋愛・結婚関係における排他性とそのパートナーとの葛藤時の対処行動選択に与える影響」『実験社会心理学研究』第43巻(1) 2003 75-84
- 高橋道子・高橋真実「親になることによる発達とそれに関わる要因」『東京学芸大学紀要総合教育科学系』第60号 2009 209-218
- 安田裕子・サトウタツヤ編著『TEMでわかる人生の径路—質的研究の新展開』誠信書房 2012
- 吉永茂美「母親が期待するソーシャル・サポート

の実態と育児ストレス、ストレス反応との関係：1-6歳児をもつ母親を対象に」『小児保健研究』第66巻(5) 2007 675-681

—謝辞—

お忙しい日々の生活のなかで、本研究にご協力いただきました保護者の方（Aさん、Bさん、Cさん）に心より感謝申し上げます。また、本論文執筆にあたり、学会発表等で貴重なご意見をくださいました先生方、ご指導くださいました鳴門教育大学大学院の浜崎隆司先生に心より感謝いたします。

—付記—

本研究は、平成29年度四国大学学術研究助成を受けて実施されました。